ソフリエのすすめ

NPOエガリテ大手前代表　古久保 俊嗣

1．ソフリエ検定の誕生

「2007年問題」（団塊の世代の大量引退を意味したが，65歳雇用延長や再就職意識の高さから，時期が5年延びて，今は「2012年問題」となっている）と「少子化問題」が社会的に議論となっていた2006年頃に，当NPOでは，「多くの若者が子供を欲しいと願っているのに，なぜ少子化が進行するのか？　若者たちが子供を産み育てることができないのは何故か？」という庶民感覚からの問題意識を持った。そこで，二世代（「母親層」「祖母層」「祖父層」）に聴き取り調査（首都圏の349人）を実施したところ，次の三つの特徴が出てきたのである。

（1）母親層が，家族（祖父母層など）に育児を手伝ってもらいたいと考えていること。

（2）祖父層が，孫育てに参画してみたいと思っていること。

（3）祖母層と母親層が，祖父層は育児の知識経験がないために，とても育児を任せられないと考えていること。

確かに祖父層も子育ての参画経験が少ないことは素直に認めていたが，単身赴任生活などの経験もあることから,祖母層や母親層が考えているほどには,家事能力が不足しているとは考えていないようであった。

上記の特徴で一番興味を引かれたのが，二番目の「祖父層の孫育て参加意識」であった。考えてみれば,この祖父層の世代はベビーブーマー世代である。戦後の民主化教育の第一期生であり，自由と博愛を重視する価値観は，他のどの世代よりも血肉となっている人々とも言える。学生運動や消費文化の担い手として戦後の社会に大きな影響を与えてきた世代である。ただ，成人期が高度成長や国際競争の時代と重なったことで，それらの尖兵となり，子育てや家事を，専業主婦であった妻たちに任せざるを得なかった世代なのである。彼らには，我が子の育児にすら参画できなかったことへの悔しい思いを持つ人も少なくないのだ。

そうであれば，祖父層に足りない育児知識や技能をしっかりと習得できる講座を行なって，修了者を資格認定すればどうだろうか。認定証を祖母層や父母層に提示できることで,周囲の不信が払拭されて，祖父層の夢である孫育てへの道が開かれるのではないかと考えたのである。

2．講座の内容

そのために，ソフリエ検定講座では，実技実習をふんだんに取り入れた実践的な内容になっている。「基礎編」では，ソフリエの心得，子供の成長と発達などの知識と意識を，「日常編」では，抱っこ，オムツ替え，寝かせつけ，着替え，身体の手入れ（鼻，耳，目，爪）などの実技を，「安全編」では，衛生や医療の知識に加えて，誤飲時の処置や人工呼吸などの救命法や，産褥期の母親の心身のケアについても学ぶ。「ふれあい編」では，沐浴，ベビーマッサージ，遊びの実習などが含まれている。そして，昼食をはさむ「調理実習」では，離乳食と一緒に参加者の昼食を作って，後片付けまで済ませるという，日常生活にも役立つ内容になっている。

【マッサージ講座】

講座をして驚いたのは，赤ちゃんを抱いたり，沐浴させた記憶を呼び戻せない人（若い頃に必ず経験しているはずだが），包丁を持ったことのない人，台所に入ったことがない人が相当数にのぼることだ。上記の調査結果のように，単身赴任などの経験

【調理】

から一定の家事能力を持っていると考えている人たちも，この講座を受けると知識や技能の不足を痛感するようである。その意味でも，参加者には刺激的であり，真剣に取り組む講座になっているのだ。

そして，最後の認定式ではソフリエ認定証が交付されるが，北九州市では，市長が一般市民の前で修了者一人一人に認定書を手渡す，という念の入れ方である。それは，ソフリエを顕彰することで，祖父層が自信と誇りをもって，育児に参画できる環境を作る試みなのである

3．祖父による孫育ての意義

「男女共同参画社会の創出」をめざす当NPOとしては，女性の「出産退職」「結婚退職」などが未だになくならないことが残念でならない。M字カーブの勤労形態がまだ残っており，育児明けの後半には「非正規雇用」の道しか残されていない状況は，あらゆる面から不合理であり，一刻も早い改善が求められる。性差なく社会への関わりと自己実現の機会が開かれることが，「男女共同参画社会」の第一歩であるからだ。

しかし，現下の経済社会環境を見れば，決して理

【集合】

【抱っこ】

想論だけでは問題が解決しないことが分かる。いたずらに「育児休業の男女共の100%取得」「保育所の待機児童ゼロ」「保育の多様化推進」を訴えてみても,直ちにそれらの問題が解決されるとは思えない。まずは家庭や地域ができることを自発的に推し進めていきながら，同時に，政府や行政や企業の施策としての改善を継続して求めてゆくしかないだろう。

そこで，現状では育児労働力としては潜在化している「祖父層」，どちらかというと受身になっている「祖母層」の育児力を顕在化することが重要だと考えているのである。一般に，祖母層の生活は多様多彩化しており,多忙で充実した毎日を送っている。そんな中で，孫の育児を引き受けることは，日常生

【認定証】

認定書

ソフリエ資格

仮仮 仮仮 様

あなたは北九州市主催の
「男2代の子育て講座」全課
程を修了されました
よってこれからの孫育てを担う
「ソフリエ」として認定すること
をここに証します

北九州市長　北橋健治

古久保 俊嗣

活のリズムを変えねばならず，全面的な関与を約束することになる。病気一つできないという不安にもかられる。ところが，潜在化している祖父層がまず手を挙げれば，祖母層は二日に一度の参画ですむことになる。さらに，婿側の祖父母層が参加すれば，週一日の参画ですむのである。

育児支援は，比較的計画が立てられるし，負荷も段階的に減ってゆく傾向がある。期間限定型の補助活動と考えられるのだ。乳幼児の育成や触れ合いを通して，新たなキズナと喜びが生まれ，社会ネットワークが広がってゆく幸福感は，比類なきものであることは言うまでもない。未来志向で創造的な社会貢献の典型をなすものである。

祖父母層の社会参画を考える時のキーワードは「ワークシェアリング」だと考えている。既にできあがっている生活リズムの中で，一人で抱え込むのではなく，皆で少しずつ分け合いながら参加する姿勢が，老成された智恵と経験に裏打ちされた成熟した流儀だと信じている。我々は，このような智恵に溢れたやり方を「バジル方式」と呼ぶ。最高のハーブであるバジルは，自分自身を主張することなく，周囲の旨みや素材を最大限に引き出す爽やかな役割を果たす。祖父母層が，バジルのように周囲を活かすことで，主体的に参画してゆく社会を，我々は「バジル社会」と呼んでおり，それこそが「ババ・ジジ・ガンバル」の「バジル」でもあるのだ。

4．ソフリエの位置付け

「ソフリエ検定講座」に参加する祖父層は，開放的で，明るくて，積極的な人々である。ボランティアや趣味の活動などに広く参加している人も多い。健康面はまったく問題ない。私は認定式で，「ソフリエは単なる通過点」と言っている。イクメンは，以下のようないくつかの段階から成り立っているからだ。

○イクメン

妻の育児を手伝う格好いい父親のことであり，当NPOでは，このような補助的な父親を「義務教育レベル」と位置付けている。

○パパシエ

当NPOが実施する「パパシエ検定講座」の修了者に与えられるもので，手伝うのではなく，独立して育児ができる知識と技能を習得した父親のことを呼んでいる。パパシエは，「マスター・オブ・イクメン（修士課程）」に位置付けられている。

○ソフリエ

パパシエの知識と技能に，祖父層らしい知恵や経験を加えた，「ドクター・オブ・イクメン（博士課程）」であり，孫育てのプロと呼べる存在と位置付けている。

○イクジイ

ソフリエのさらに上位に，「キング・オブ・イクメン（王者）」となる「イクジイ」が存在する。「イクジイ」は，自分の孫だけでなく，地域の乳幼児の育児や教育に積極的に参加する「スーパーじいさん」のことである。

従って，「ソフリエ」や「イクメン」はあくまでも通過点であって，最終目標は「イクジイ」にあることが分かっていただけると思う。祖父層は，社会の将来を考えながら，何らかの形で，次世代を担う子供たちの育成に関わりたいという気持ちを持っている。現役時代には，部下の育成に腐心した長年の経験も持っている。祖父層は，これからの社会にとって真に頼りになる人的資産である。

しかし，長年にわたって仕事中心の生活を続けてきたために，祖母層に比べて地域や社会との関わりがどうしても薄くなっている。それゆえに，地域参画のハードルを越えられない人も少なくない。このハードルを越えて，地域と社会に入っていく第一歩は，まずは「家庭への参画」にあると思う。祖母層との共同，子供たち世代への応援などをきっかけにして，祖父層の活動の範囲が，「家庭への参画」から「地域への参画」に，そして「社会への参画」に次々と広がっていくはずだ。その活躍が，現役世代のワーク・ライフ・バランスの実現をしっかりと後押しすることになる。このような好循環を生み出すことこそが，ソフリエ制度の最終的な目的と言えるだろう。

5．「ソフリエ検定講座」を実施するには

当NPOは，全国の自治体と共同で「ソフリエ検定講座」を開催してきている。月1回程度の頻度で，全国で出張研修を行なってきた。先に述べたように，実技指導が中心になった講座であるために，1回の定員は15名になっている。受講者3～4名に1体以上の赤ちゃん人形を準備して，受講者は必ず十分な時間の実技を体験することになる。補助講師も数名は参加している。

このような少人数制の講座のために，全国に点在する「ソフリエ志願者」のニーズにタイムリーに対応できているとは言えない。東京での講座に神戸から駆けつけた受講者もいたほどである。

そこで，当NPOでは，全国のNPOやボランティア団体などで「ソフリエ検定講座」の実施をしたいと考えている団体に，カリキュラム，テキスト，パワーポイント,トーキングペーパーなどを移転して，当NPOからの出張講座ではなく，現地で適宜実施いただける体制をめざしている。そのために，前述のような充実した教材を準備することに注力してきている。

北九州市での「ソフリエ検定講座」は今年で3年目になるが，1年目は全ての科目を当NPOからの出張講師が実施し，2年目は半分の科目を現地講師で担当していただき，3年目の今年は全科目を現地講師にお願いすることになっている。認定証だけは当NPOで発行するが，そのほかの面では，地場ならではのローカル色も十分に盛り込んだ内容にしているのである。

「ソフリエ検定講座」の実施に興味のある方は，当NPOホームページ（http://egaliteo.com/）の「お問合せ」にメールでご連絡をいただきたい。

6．NPOエガリテ大手前

「エガリテ」は仏語で「平等」の意,「大手前」は大阪にある高校の名前である。10年ほど前に，高校卒業後30年ぶりに首都圏在住者の同窓会があった。この高校の前身は女学校であり，出席番号は女子が終わってから男子が始まるという方式を，終戦直後の共学化の時点から続けてきている。入学時には男女ともに学生は驚いたものだ。優秀な女子が多く「女性上位」の空気をも吸いながら同窓生は育った。

ところが30年ぶりに再会してみると，女性のほとんどが専業主婦であり，就職経験すらない者も少なくなかった。当時は4年制大卒女子の就職の道はほとんど閉ざされていたのである。そして，自分たちの子供の世代が社会に出る時期を迎えていた。「男女機会均等」「男女共同参画」が謳われながら，社会の実態は大きくは変わっていないではないか。

そんな問題意識を共有した仲間たちが「男女共同参画社会の創出」をテーマとして社会貢献活動に取り組んだのが,「NPOエガリテ大手前」の始まりである。高校のDNAが30年後に突然発現したような現象だったと言えよう。それから7年が経過して，同窓集団の色彩は薄れ，幅広い層が参加するオープンなNPOになっている。

7．私自身の働き方について

私自身も，いわゆる「企業戦士」「猛烈ビジネスマン」であり，家庭や地域は，専業主婦の妻に任せっきりだった。子供が小中学生だった米国駐在時には，家族が団結して協力しなければ何事も進まないこともあって，何かにつけて家族と一緒の時間を多く持った。しかし，帰国すれば，元の「不在亭主」となってしまった。当時の日本の社会文化に完全に染まってしまったのだ。今も，私のビジネスマンとしての側面しか知らない人たちは,「猛烈ビジネスマン」だと見ている人も少なくはない。

しかし，私自身としては，明らかな変化を実感している。私は「机の脚が一本や二本では立てない。三本では不安定でしかたがない。四本，五本と増えるほどに安定感が増す。さらに増えると外見はともかく，どっしりした縄文杉のようになる」と言っている。打ち込むものが複数あってこそ人生は安定すると考えるようになってきたのだ。

そもそも「未成年は勉学」「成人は労働」「老年は趣味」という「横割り思考」には危険なものを感じる。どの年齢であっても「勉学」「労働」「趣味」「スポーツ」「芸術」「社会参画」「家事・育児」「交友」などが複合的に実践されることが,「人生の進化」だと考えているからだ。これからの人たちが,「勉学」「労働」などの単線キャリアに極端に埋没することなく，人生を進化させていって欲しいと感じている。

NPOエガリテ大手前代表　古久保俊嗣
プロフィール
商社員としてアメリカ，ニュージーランド駐在。2004年，NPOエガリテ大手前を設立。男女共同参画の調査研究，政策提言，研修などを行う。毎年春に発表する「子育て環境ランキング（主要都市)」は幅広い層から注目されている。「男2代の子育て講座（ソフリエ・パパシエ認定)」「子育て今昔物語」「遊びの鉄人ーあそぶきょう」などの個性的な研修を全国で展開。祖父のための孫育て技能士資格「ソフリエ」は新・キーワードとして定着。一橋大卒。